

外濠・内濠を望む潜在的視点場分布と現状

萩森 大佑¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2丁目33)
E-mail:daisuke.hagimori.97@stu.hosei.ac.jp

²正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2丁目33)
E-mail:fukui@hosei.ac.jp

江戸城外濠は東京に現存する貴重な水空間であるが、その価値は十分に活かされておらず、外濠周辺で生活する人々の外濠に対する評価は必ずしも高くない。本研究ではその原因が濠を望む視点場の少なさにあると仮定し、建物から濠を望むことのできる視点場からの眺望や用途・公共性について調査し、潜在的視点場について外濠・内濠の比較を行った。その結果、外濠周辺では91%、内濠周辺では96%の建物フロアが視点場として活用しうる立地条件を持っていたが、実際に視点場として機能している建物フロアは外濠では40%、内濠周辺では59%と差があり、外濠周辺は内濠周辺と比較して視点場としての立地条件を活かしていないことが判明した。また、外濠沿いの視点場は視対象の異なる3種類に分類できることや、濠沿い道路に接続する道路幅員が広ければ、視点場となる建物の範囲が広がることを指摘した。

Key Words :view point,Sotobori moat,landscape

1. はじめに

(1) 研究背景と目的

江戸城外濠は、徳川家康が江戸に入府した1590(天正18)年から半世紀以上をかけ、幾重にも濠をめぐらせた壮大な惣構の一部であり、1956(昭和31)年に、国史跡として指定された。かつて外濠周辺に屋敷を構えた明治時代の有力者達は、外濠側に庭を配置し、バルコニーからは外濠や対岸の風景が一望でき、眺望という要素が生活に組み込まれていた¹⁾。

現在、水質改善を中心に外濠の環境改善を望む声はあるが、外濠周辺で生活する人々の外濠に対する意識は必ずしも高いわけではない。現代の外濠周辺は業務機能が中心に集積しており、眺望を楽しめる空間はほとんど見当たらない。濠を望む視点場の少なさは、市民が外濠を意識する機会が少ないことと関係しており、こうした現状を把握することが必要であると考えられる。

都市内の視点場や眺望景観については、横山らが京都市内を対象として視点場の空間特性を記述し、視覚行動との関係を把握する研究を行っている²⁾。外濠については水質³⁾・空間構成⁴⁾・計画など⁵⁾、様々な研究が行われているが、外濠を対象とした視点場の研究は行われてい

ない。

そこで本研究は、江戸城外濠と内濠を対象として視点場の現状を調査し、外濠周辺に存在する潜在的視点場の分布とその特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究方法

外濠・内濠周辺の建物のフロアを対象に、次の3つの調査を行う。

・視対象分類調査

調査対象フロアからなにが見えるかを、視対象によって分類する。

・フロア用途分類調査

調査対象フロアが、現在どのような施設として利用されているかを分類する。

・公共性分類調査

調査対象フロアに、どの程度の公共性が存在しているかを分類した。

これら調査結果に関して考察を行うことで、現在の外濠周辺の視点場の特徴を整理する。

2. 調査範囲・方法

外濠周辺の調査範囲は、JR市ヶ谷駅からJR飯田橋駅間の約1.5kmの範囲で、牛込濠・新見附濠を望むことのできる建物、内濠周辺に関しては、日比谷駅からほぼ同距離1.5kmを調査範囲とした、日比谷濠・馬場先濠・和田倉濠を望むことのできる建物とする(図1)。

対象は1階から10階までとし、フロア単位で調査した。路上から建物の外観を観察することにより、現地調査を実施した。調査期間は2013年8月20日から9月8日である。

視対象分類調査は、(図2)のように分類した。分類のうちNO.3の利用状況によって見えないフロアは、主にブラインドが下りてしまっていて濠を望めないフロアが該当する(図3)。

フロア用途分類調査は、PUBDIS(公共建築設計者情報システム)によって採用されている施設用途を参考とした。

公共性分類調査は、(図4)のように分類した。

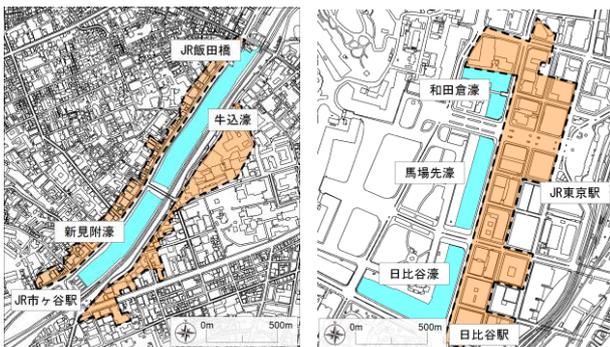


図1 調査対象範囲(左:外濠周辺, 右:内濠周辺)

NO.	分類
1	対岸の緑も水面も見えるフロア
2	対岸の緑は見えるが、水面は見えないフロア
3	利用状況によって見えないフロア
4	見えないフロア

図2 視対象分類調査の分類定義



図3 フロアごとの視点場状況の違い

分類	定義
public	誰でも入ることができる
semi public	入るために何らかの権限(フロアの構成員, 入金)が必要
private	個人の自由な出入りが許可されていない

図4 公共性分類調査の分類定義

3. 調査結果

現地調査結果は(図5)のようになった。

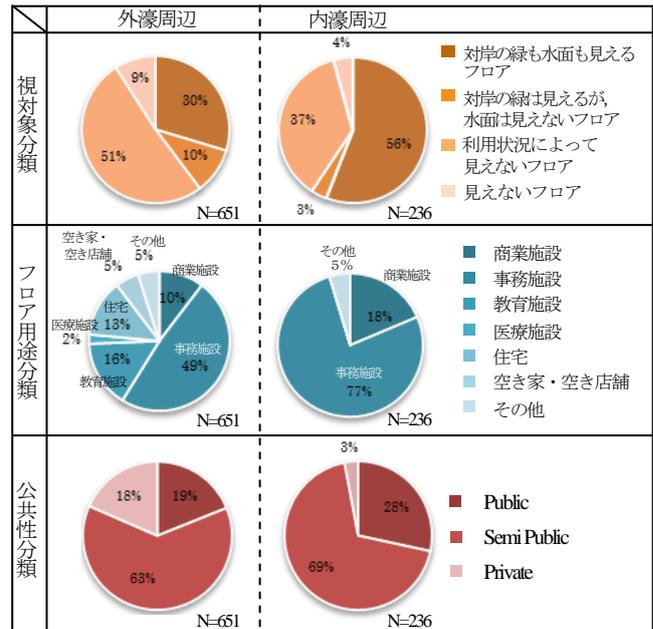


図5 調査結果一覧

・視対象分類調査

分類の結果、外濠周辺のフロアは総数651フロアに対し91%にあたる592フロア、内濠周辺では総数236フロアに対し96%にあたる226フロアの潜在的視点場が確認できた。このうち、1.対岸の緑も水面も見えるフロア、2.対岸の緑は見えるが、水面は見えないフロア、3.利用状況によって見えないフロアは、フロアの利用方法によっては濠を望む視点場となりうることから、「潜在的視点場」であると考えられる。外濠・内濠とも潜在的視点場を十分持つにも関わらず、外濠周辺で濠を望めるフロアは651フロア中259フロア(40%)、内濠周辺は236フロア中140フロア(59%)と、外濠周辺は内濠周辺と比較して、視点場として活用されていないことが判明した。

また、視対象分類調査の結果を3次元に起こしたのが(図6)である。

・フロア用途分類調査

外濠周辺は事務施設が316フロアと全体の49%と最も多くの割合を占めており、大学・専門学校などの教育施設が多い。内濠周辺は事務施設と商業施設で全体の95%

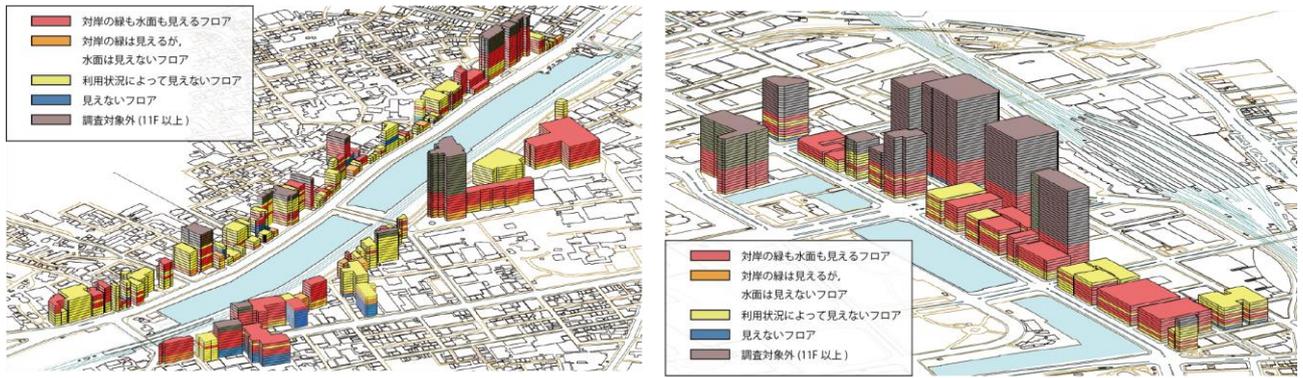


図6 視点場分類調査の3次元図
(左：外濠周辺，右：内濠周辺)

を占めた。また、外濠周辺は、空き家・空き店舗も多い。

・公共性分類調査

外濠周辺の方が公共性のあるフロアが少ないことが判明した。両者ともオフィス街であるためSemi publicなフロアが多くなっているが、ファッションショップなどが多い内濠周周辺の方が若干高い数値を示している。Privateなフロアは、高層マンションの開発や、空き家・空き店舗の影響によって外濠周辺が比較的高い。

4. 考察

(1) 視点場特性に対する考察

前述した3つの調査結果に階数を加えた4つの項目に関してクロス集計を行った。

外濠周辺の公共性を階数ごとに比較してみると、低層部(1~3階)で公共性の高いフロアが多い(表1)。しかし、低層部での視対象分類結果を見てみると、299フロア中161フロア(53%)が「利用状況によって見えないフロア」に分類されており、現状では一般利用者の利用が多い低層部から、外濠を望めるフロアは少ない(表2)。

公共性分類	階数										総計
	1F	2F	3F	4F	5F	6F	7F	8F	9F	10F	
public	79	20	10	1	3	3	1	3	2	1	123
semi public	19	63	56	51	50	46	43	36	26	18	408
private	10	25	17	15	12	11	10	8	6	6	120
総計	108	108	83	67	65	60	54	47	34	25	651

表1 公共性分類×階数データ

視対象分類	階数										総計
	1F	2F	3F	4F	5F	6F	7F	8F	9F	10F	
1.対岸の緑も水面も見えるフロア	13	19	27	25	23	26	24	21	15	193	
2.対岸の緑は見えるが、水面は見えないフロア	32	20	11	1	1	1	1	1	1	66	
3.利用状況によって見えないフロア	60	60	41	31	34	35	26	23	13	333	
4.見えないフロア	16	15	12	8	6	1	1	1	1	59	
総計	108	108	83	67	65	60	54	47	34	25	651

表2 視対象分類×階数データ

図6を見ると、外濠周辺は同じ建物内でも視対象がフロアによって異なるのに対し、内濠周辺は同じ建物内で視対象が変化しない。これは、高さによって視対象が変化する外濠の空間的特性によると考えられる。また、外

濠周辺では1つの建物内に複数のテナントが入っている場合が多いため、フロアによってブラインドの開閉状況が異なることも影響していると考えられる。

(2) 空間考察

以上の考察を踏まえて、外濠・内濠に関する空間的な考察を行う。外濠は、濠水面の高さレベルが道路よりも10mほど下がっている。この特性により、外濠周辺には大きく分けて3つの視点場特性が存在する(図7)。図のA: 新宿区側外堀通り低層部からは、水面は見えないが、対岸の緑を眺望できる(写真1)。B: 千代田区側からは、視界のほとんどを外濠公園が占める(写真2)。C: 高層部からは、水面と対岸の緑の両方を眺望できる(写真3)。

Aは利用者が非常に多いため、フロアだけでなく歩道等も含めてこの空間をうまくデザインすることができれば、外濠全体の雰囲気を変え大きく変えることができると考えられる。

Bは外濠公園の空間は視点場としてうまく活用されているが、公園を降りてしまうと緑の壁が立ち塞がっているような状況である。

Cからの眺望範囲は広く、外濠の空間を最も活用していると考えられるが、水面からの距離は遠い。この視点場をどれだけ一般の人に開放・誘導することによって、外濠を意識する機会が増加すると考えられる。

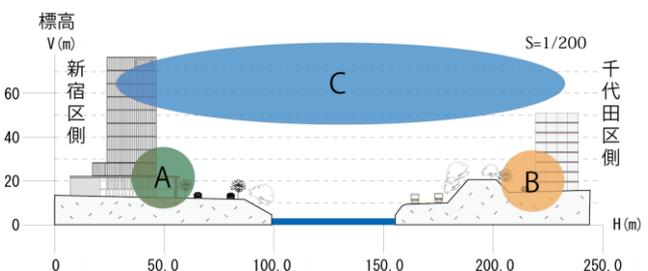


図7 空間構成の特徴



写真1 新宿区側低層部からの眺望



写真2 新宿区側低層部からの眺望



写真3 高層部からの眺望

次に、平面的な考察を行う。外濠・内濠周辺では、道路幅員が異なる。特に濠沿いの道(外堀通り・日比谷通り)に接続する道路幅員の差が大きい。外堀通りに接続する道路は、幅員5～8mがほとんどであるが、日比谷通りに接続する道路は15～20mの道路が多い。この幅員が大きい場合には、直接濠に面さない建物でもフロアの一部から濠を望むことができ、潜在的視点場となる(図8)。

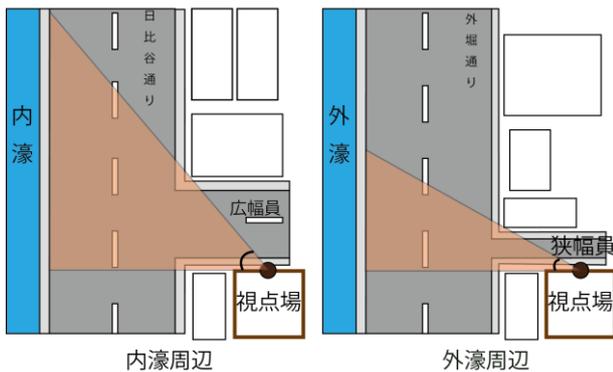


図8 濠に面さない建物からの眺望の違い

4. 結論

本研究の結論は、以下の4とおりである。

- ・外濠・内濠周辺の建物フロアについて、そこから見える視対象、フロア用途、公共性について調査し、現状を確認した。
- ・外濠周辺の建物フロアのうち、全体の91%のフロアが潜在的視点場であることを確認できた。しかし、実際に視点場として機能している建物フロアは外濠では40%、内濠周辺では59%と差があり、外濠周辺は内濠周辺と比較して視点場としての立地条件を活かしていないことが判明した。
- ・外濠沿いでは、建物の高さによって視対象の異なる3種類の視点場特性が存在することを指摘した。
- ・濠沿いの道路に接続する道路の幅員と、潜在的視点場の関係を指摘した。

参考文献

- 1) 法政大学エコ地域デザイン研究所：外濠～江戸東京の水回廊～，p23-73，鹿島出版，2012
- 2) 横山 広充，宮岸 幸正：視点場近傍の遮蔽状況を考慮した眺望景観の記述方法に関する研究 京都市内の眺望景観を対象として，日本建築学会論文集，Vol. 75，No. 656，pp2415-2421，2011.02
- 3) 吉岡 佐，栗栖 聖，花木 啓祐：江戸城外濠の水質改善を目的とした環境用水導入の効果とコスト評価，土木学会論文集G，Vol. 68，No. 7，pp. III_691-III_702，2013.03
- 4) 大塚 佳臣，麻 永隆，栗栖 聖，窪田 亜矢，中谷 隼，花木 啓祐：空間構成要素と市民の特性に着目した江戸城外濠の価値選好評価，土木学会論文集G，Vol. 67，No. 6，pp. II_173-II_182，2012.3
- 5) 阿部 貴弘，篠原 修：江戸における城下町中心部の都市設計，土木学会論文集，NO. 632，pp63-76，1999.10

(?)